

# 平成 30 年度 大分市教育実践記録

大分市立判田小学校 江隈 美佐

## 教師が授業力を付ける校内研修

～外国語活動「話すこと [やり取り]」の指導の探求を通して～

### 1 はじめに

「職員室で英語が聞こえる。」これは、この4月に本校に赴任した教師の言葉である。「英語が聞こえる。」と言っても、難しい会話ではない。“O.K.”、“That’s Right.”などの簡単な英語を使った [やり取り] である。

私たち小学校教師は、授業を行う際、自分自身が子どもの頃受けてきた授業のイメージが頭の片隅にないだろうか。私自身はそうである。しかし、小学校外国語教育に関しては、経験がないためイメージがわきにくい。いわゆる未知の内容に挑むとあって、小学校外国語活動が導入されて8年が過ぎようとしているが、未だに英語に対する抵抗感は少なくないと感じている。

そんな中、校内研究で外国語活動に4年間取り組んできた。1小1中という立地条件のため、関わりが固定化している児童の実態改善と教師の授業力向上の二つをねらった。

この2年間は「話すこと [やり取り]」に焦点を当て、研究を行ってきた。研究に取り組んだからといって英語に対する抵抗感が消えたわけではない。しかし、外国語活動の授業に臨む教師のハードルは確実に下がっていると実感している。一種の英語アレルギーがあるとと言われる小学校現場で、どのように研究を深めていったかをまとめてみた。

### 2 校内研究で外国語活動を

判田小学校では、平成27年度より外国語活動の研究を始めた。本校には学力向上支援教員が在籍し、外国語活動の授業の指導支援を行っていたため、教師は、外国語活動の授業のイメージを掴むことができた。しかし、各自で指導計画を立て活動を組み立てるとなると、難しいのが現状であった。また児童は、同じクラスや学年でグループが固定化してしまう傾向にあった。英語という新しい道具を用いて児童同士がかかわる場があれば、積極的にいろいろな友達とコミュニケーションを楽しむ姿をめざせるのではないかと、そして教師の授業力向上もめざせるであろうと考え、外国語活動の研究に取り組むことになった。

コミュニケーションを楽しみ、だれとでも進んでかかわろうとする児童の育成  
～外国語活動の実践を通して～

平成27・28年度 研究主題

- ① 「相手意識」「目的意識」を明確にしたコミュニケーション活動を設定する。
- ② バックワードデザインの考え方をを用いて単元構成をする。
- ③ 教師自身が英語を使うモデルとなる。

教師の授業力向上の面から、この3点に取り組むことにした。理由は次の通りである。

判田小校区で生活していると外国語を使わなければならない場面にはなかなか出会わない。コミュニケーション活動を行わせる際、児童に「相手意識」「目的意識」をしっかり持たせる

ことで学習へのモチベーションを高めることができると考えた。また、教師自身も、「相手意識」「目的意識」を大切にすることでより良い授業づくりができるのではないかと考え、①を設定した。

本校は、この前年度まで2年間、国語科の「単元を貫く言語活動」について研究を行ってきた。そこでは、単元の最後の姿を最初に児童に提示し学習を進めるという、いわゆるバックワードデザインの方法を用いた。児童はゴールのモデルとなる活動を頭に描きながら、学習を深めていくことができた。外国語活動も国語科と同じように授業を組み立てることが有効であると考え、②に取り組むことにした。

3つ目は、教師の英語力についてである。今まで授業で外国語を使ってきたことがない教師にとって、児童の前で英語を使うことはかなりハードルが高いと感じられた。正しい英語でなくとも、教師が英語を使っているところを児童に見せることが、児童の英語を使おうとする姿勢につながると考え、③にも取り組むことにした。

さらに、外国語活動の指導案を書いたことがない教員も多くいたため、他教科と同じように誰でも作成できるようにモデルを示し、指導案の形式を統一した。（\*資料I）



#### 研究のまとめより

##### （成果）

- ・相手意識・目的意識を明確にした活動を設定することにより、積極的に活動する児童の様子が見られた。
- ・単元のゴールを達成するための活動を仕組むことができ、どのように授業を組み立てればよいかを教師が理解できた。
- ・クラスルーム・イングリッシュを使う頻度が増えた。

##### （課題）

- ・決まったフレーズを英語で[やり取り]するだけでなく、さらにコミュニケーションを深めるための工夫
- ・指導者の英語力向上
- ・新学習指導要領に対応したカリキュラムの作成

平成 27・28 年度の研究では、教師が、外国語活動の授業づくりの方法を理解することができたと思う。また、全単元では難しいが、少なくとも検証授業においては、単元のゴールを意識し、英語を使わなければならない場面を授業の中で設定することができていた。英語を使うモデルとなるべく、クラスルーム・イングリッシュに取り組んだが、授業の中で英語をさらに使うには、引き続き研修が必要であると感じた。

### 3 小学校学習指導要領の改訂

本校で研究を進めている間に、新小学校学習指導要領が告示（平成 29 年）され、小学校外国語教育に大きな変化が起こった。改訂の主な内容は次の通りである。

#### 3.4 年生

外国語活動（年間 35 時間）

目標「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成すること」

内容「聞くこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」

#### 5.6 年生

外国語科（年間 70 時間）

目標「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成すること」

内容「読むこと」「聞くこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」

「書くこと」

外国語（英語）学習の開始学年が繰り上がり、授業時数も増えた。さらに、高学年では「外国語科」となり、以前の「活動」とは異なる目標が設定され、「読む」「書く」も導入された。また、全学年に共通して、「話すこと [やり取り]」（以下 [やり取り]）が位置づけられた。

### 4 [やり取り] に焦点を当てた校内研究

平成 27・28 年度の校内研究の成果と課題を踏まえ、平成 29 年度は、さらに外国語活動の研究を継続することになった。今回は外国語活動だけでなく、高学年の「外国語科」についても研究に取り組むことにした。

今回小学校学習指導要領で多くの点が改訂されたが、中でも全学年に共通する「話すこと [やり取り]」に焦点を当てて研究を行うことにした。

#### (1) 平成 29 年度の校内研究

[研究主題]

英語での [やり取り] を通して、コミュニケーションを楽しむ児童の育成  
～新学習指導要領における外国語活動・外国語科の指導の探求を通して～

[めざす子ども像]

- 英語表現に慣れ親しみ、活用する子
- 相手の話していることを推測しながら聞く子
- 友達と関わり、コミュニケーションを楽しむ子

[研究仮説]

ペアワークやグループワークを積極的に取り入れ、英語表現を繰り返し学習する活動を工夫して仕組みれば、コミュニケーションを楽しむ児童が育つであろう。

新しくうたわれた [やり取り] とはどのようなものか。それが研究の始まりであった。校内研修にて [やり取り] の内容 (\*資料 2) を確認し、研究の重点として、以下4点について取り組むことにした。

- ①相手意識・目的意識を明確にした友達との [やり取り] をさせる。基本的な語句や表現を用いて、質問したり質問に答えたりするペアワークやグループワークを工夫して仕組む。発達段階に応じた [やり取り] のポイントを探る。
- ②既習表現を繰り返し使う活動 (Small Talk 等) を各授業で仕組んだり、歌やチャンツ、読み聞かせなどで英語表現に触れさせたりする機会を多くもつ工夫をする。
- ③次期学習指導要領の指導内容に沿った指導計画・指導案を作成する。
- ④児童の外国語を使おうとする態度を育成するため、そして教師自身の英語力向上のために指導者が英語を使うモデルとなる。指示やほめ言葉のクラスルーム・イングリッシュの英語表現を明記した**授業の流れシート** (細案) (\*資料 3) を作成し活用する。

(2)平成 29 年度 [やり取り] 1 年目の実践

検証授業 I 平成 29 年 6 月 29 日 (木曜日)

2 年生「色形であそぼう」「七夕かざりをあつめよう。」

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]
ラーニ先生に日本の七夕飾りを紹介するために、七夕飾りの色・形カードをたくさん集めよう。	A : Hello. B : Hello. A : ○○ (色) (形) , please. B : OK, here you are. A : Thank you. A : See you. B : See you.

(考察)

授業の中で、2 年生が英語で [やり取り] をしながら楽しそうにカードを集めている姿が見られた。前年度までの「相手意識」「目的意識」を大切にした単元づくりが生かされていたため、最後まで児童が積極的に活動したのだと考える。

[やり取り] を充実させるために、活動の回数、教師のデモンストレーションの姿勢や教具を置く位置を工夫する必要があると感じた。

検証授業Ⅱ 平成 29 年 11 月 29 日 (水曜日)

5 年生“What would you like?” 鍋メニューを紹介しよう (Hi, friends! 1 Lesson9)

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]
「ダイスケ先生や友だちをハンダシュランの店に招待しよう」	店 : Hello. (全) Welcome to ○○restaurant. 客 : Hello. 店 : This is our menu. 店 : What would you like? 客 : I'd like ○○. 店 : O.K. (食材カードを貼る) 店 : This is ○○nabe. ○○, ○○, ○○ and ○○. Here you are. 客 : Thank you

(考察)

今回の授業で、[やり取り]には、「あいさつする→繰り返す→反応する→質問する」という段階があるのではないかということが分かってきた。

また、活動と活動の間に振り返りの一つとして設定していた中間評価を、アイコンタクトやクリアボイスなどの評価だけに使うのではなく、「やってみる→困りを出し合う→正しい英語表現を復習し、レベルアップする→再度やってみる」といった英語の学びとして利用することができた。

さらに、教師が授業の流れシートを作成し、細案を英語で書くことで授業でどのような英語を使えば児童が指示を理解できるか、どのように言えば効果的かということが分かってきた。英語での細案作りが教師が自信を持って授業で英語を使う姿につながった。

検証授業Ⅲ 平成 30 年 1 月 24 日 (水曜日)

3 年生“Who are you?” 動物クイズ大会を開こう (新教材“Let's Try! 1”Unit 9)

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]	
“Who are you?” 動物クイズ大会をしよう	<u>A: 出題者</u> Hello. 【ヒント①】 I'm ~. / I like ~. / たん語だけ 【ヒント②】 I'm ~. / I like ~. / たん語だけ Yes, I am. I'm a ~. / No. See you.	<u>B: 回答者</u> Hello. Who are you? Hint, please. Hint, please. Are you a ~? See you.

(考察)

授業の流れシートを利用し、教師は自信を持って英語で指示や説明を行うことができた。

また、[やり取り]を自信をもって行わせるために、[やり取り]の内容を板書して視覚的にとらえさせる工夫がなされ、児童はそれらを参考に活動に取り組んでいた。しかし、[やり取り]を充実させようとするほど、[やり取り]の内容や板書内容の難易度が高くなる傾向となった。使用言語の精選・視覚情報の精選が必要であると感じた。学年ごとの[やり取り]のモデルを教師が共通理解する必要性が出てきた。

### (3) 次年度への方向性

1年目の実践から、研究の重点として掲げた4点に照らして、次年度の方向性を探った。

- ①相手意識・目的意識を明確にした友達との[やり取り]をさせる。基本的な語句や表現を用いて、質問したり質問に答えたりするペアワークやグループワークを工夫して仕組む。発達段階に応じた[やり取り]のポイントを探る。

発達段階に応じた[やり取り]の系統を作成する。

- ②既習表現を繰り返し使う活動を各授業で仕組んだり、歌やチャンツ、読み聞かせなどで英語表現に触れさせたりする機会を多くもつ工夫をする。

- ・朝の会、給食時間に英語の歌やチャンツで英語の音声に親しませる。
- ・児童の目に触れる掲示物を作成する。
- ・Small Talk やクラスルーム・イングリッシュで英語を聞かせる。

- ③次期学習指導要領の指導内容に沿った指導計画・指導案を作成する。

新教材を使った指導案の作成を行う。

- ④児童の外国語を使おうとする態度を育成するため、そして教師自身の英語力向上のために指導者が英語を使うモデルとなる。指示やほめ言葉のクラスルーム・イングリッシュの英語表現を明記した**授業の流れシート**を作成し活用する。

- ・授業の流れシートを活用する。
- ・校内研修の All English でのアイスブレイキング（最初の5分程度で授業の Activity を教師を児童に見立てて行うもの）でさらなる教師の英語力向上を図る。

これらを踏まえ、平成30年度の研究主題等を次のように決定した。

#### (4) 平成 30 年度の校内研究

[研究主題]

英語での [やり取り] を通して、コミュニケーションを楽しむ児童の育成  
～新学習指導要領における外国語活動・外国語科の指導の探求を通して～

[めざす子ども像]

- 英語に慣れ親しみ、表現する子
- 相手の話していることに反応しながら聞く子
- 友達と関わり、コミュニケーションを楽しむ子

[研究仮説]

児童の発達段階に応じて、簡単な語句や既習表現を用いた [やり取り] を工夫して仕組みば、コミュニケーションを楽しむ児童が育つであろう。

研究を始めるにあたり、めざす子ども像を学年部ごとに設定し、それに合った [やり取り] の系統を作成した。

#### めざす子ども像

	○英語に慣れ親しみ、 表現する子	○相手の話していること に反応しながら聞く子	○友達と関わり、コミュニケ ーションを楽しむ子
低	英語表現をまねして声 に出そうとする子	体の動きや表情で反応し ながら聞く子	英語表現を使って相手に伝え ようとする子
中	既習表現を使おうとす る子	態度や簡単な言葉で反応 しながら聞く子	既習表現を使ってだれとでも 進んで関わり合おうとする子
高	既習表現を進んで使お うとする子	簡単な言葉やほめ言葉を 使いながら聞く子	既習表現を使って会話を広げ ていこうとする子

#### [やり取り] の系統

	[やり取り] の目標	[やり取り] の例
低	基本的な表現を用いて、あいさつしたり、 伝えたりする	AB: Hello. A: ○○, please. B: Here you are. A: Thank you. AB: See you.
中	相手の話したことに對して、うなずいたり 簡単な言葉で返したりする。	AB: Hello. A: Do you like blue? B: Yes, I do. A: Me, too. (Wow.) AB: See you.

高	相手の話したことに簡単な言葉で返したり、質問をしたりして会話を広げる。	AB: Hello. A: Do you like soccer? B: Yes, I do. A: Nice. Me, too. A: Do you like “Trinita”? B: No, I don't. I like “Gamba”. A: I see. AB: See you.
---	-------------------------------------	---

そして、次の3点について検証していくことにした。

- ② コミュニケーションを楽しむ [やり取り] の工夫
- ② 相手意識・目的意識を明確にした単元の指導計画・指導案の作成 (\*資料4)
- ③ クラスルーム・イングリッシュ (\*資料5・6) や授業の流れシートを使った教師の英語力向上の取組

また、振り返りシートにのせていた「スマイル・クリアボイス・アイコンタクト・レスポンス」をコミュニケーション基礎になるものとして位置づけ、「[やり取り]のポイント」と明記した。シートの形式を全学年で統一し、めあてに対するその時間の振り返りを学年に応じて、記号選択か記述で行わせることにした。(\*資料7)

### (5) 平成30年度 [やり取り] 2年目の実践

検証授業 I 平成30年5月30日(水曜日)

3年生 I like blue. すきなものをつたえよう(Let's Try!1 Unit4)

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]
友だちにインタビューして、3-2 だれでしょう? クイズをしよう	A&B: Hello. (Do Janken) Winner: Do you like soccer? Loser: Yes, I do. I like soccer. / No, I don't. I like baseball. Winner: Yeah! (Yes! Wow! Oh no! OK!) (Change the role) A&B: Thank you. See you.

(考察)

活動を行わせる前にインタビューの答えを予想させたことが意欲的に活動することにつながった。ただ活動を楽しむだけでなく、考えて活動することが児童にとって学びにつながることを実証できた。

教師が授業の流れシートを有効利用し、積極的にクラスルーム・イングリッシュを使うことができた。日常生活でも児童に英語を聞かせることが積み重ねられており、指示や Small Talk をよく理解していた。

検証授業Ⅱ 平成 30 年 6 月 20 日 (水曜日)

6 年生 Turn right. 道案内 (Hi, friends!2 L4)

Where is the treasure? 位置と場所 (We Can!2 U7)

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]
道案内の言い方を使って, Daisuke 先生に判田の名所を案内しよう	A: Where is the ~? B: Go straight. Turn <b>【right/left】</b> . Stop. Here is the ~. A: Thank you.  [やり取り] カード O.K? Pardon? Right? Left? Good. Nice.

(考察)

中間評価で実演した児童が, 定型以外の [やり取り] をしていたことで, その後の活動で [やり取り] を広げようとする児童が増えた。高学年では [やり取り] をどのように広げていったら良いかを考えるきっかけになった。

児童の生活に根付いた店などを題材にし, 「相手意識・目的意識」を大切にしたい授業づくりができ, 外国語活動の授業の形が教師に定着した。

さらに, 授業の流れシートを作成したことで, 教師が英語を主とした指導をすることができた。

検証授業Ⅲ 平成 30 年 7 月 11 日 (水曜日)

2 年生 スイミー水族館をつくろう

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]								
海の生き物を集めてスイミー水族館をつくろう	<table border="0"> <tr> <td>Hello.</td> <td>Hello.</td> </tr> <tr> <td>○○, please.</td> <td>O.K.○○, here you are.</td> </tr> <tr> <td>Thank you.</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Bye, see you.</td> <td>Bye, see you.</td> </tr> </table>	Hello.	Hello.	○○, please.	O.K.○○, here you are.	Thank you.		Bye, see you.	Bye, see you.
Hello.	Hello.								
○○, please.	O.K.○○, here you are.								
Thank you.									
Bye, see you.	Bye, see you.								

(考察)

[やり取り] のデモンストレーションを教師が見せるだけでなく, 児童を巻き込んで発話させるなどの方法を用いて, 児童が英語を使う場面を増やしていた。

(ALT-HRT ⇒ ALT-HRT・児童 ⇒ ALT・児童-HRT)

他教科 (国語・図画工作) と関連させた活動を仕組むことができた。

また, 教師の表情やジェスチャーが豊かになり, よりよいコミュニケーションのモデルとなっていた。

**検証授業Ⅳ** 平成 30 年 10 月 19 日（金曜日）

1 年生 すきなくだものを つたえよう

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]
すきなくだもののステッカーを集めて、はらぺこあおむしのお面を作ろう。	A&B: Hello. A: ○○, please. B: ○○, here you are. A: Thank you. A&B: See you.

(考察)

日常生活の中でもクラスルーム・イングリッシュを使用していたため、児童が英語表現に慣れ親しんでいた。プリントを受け取る際などに、“Here you are.”、“Thank you.”などの英語が児童から自然と出ていた。教師が英語を話す良いモデルとなったことが、児童の英語を話そうとする姿につながったと感じた

外国語活動の授業づくりで教師の協働が行われ、教材研究を進める際などに様々な指導に関する情報共有ができた。学級担任だけでなく、その学年に携わる教師全員で児童育てを行うことが定着した。

**検証授業Ⅴ** 平成 30 年 10 月 19 日（金曜日）

4 年生 This is my favorite place. お気に入りの場所を紹介しよう

(Let's Try!2 Unit8)

単元のゴール	モデルとなる [やり取り]
Daisuke 先生にお気に入りの場所を伝えよう。	A: Let's go! Go straight. Stop. Turn [right / left] . This is my favorite place, (the music room). B: Wow! / Me, too. / Oh. / I see. / Nice. / Good. Thank you.

(考察)

形態を変えて、いろいろな友だちとペア活動を行う工夫がなされていた。多くの友達とかわることで、何度も発話し、英語に慣れることができていた。

ICT を活用し、児童が聞きたい、やってみたいと思う活動を展開できた。ここでも、学年の協働がなされていた。

給食準備の際学級担任が、“Go straight.”、“Turn right.”“Stop.”と声をかけながら児童を引率し、クラスルーム・イングリッシュを日常的に使用していた。児童の前で英語を使うことへの躊躇は見られなくなった。

検証授業VI 平成 30 年 10 月 19 日 (金曜日)

5 年生 She can run fast. He can jump high. できること (We Can! 1 Unit 5)

単元のゴール

先生クイズ大会をしよう

モデルとなる [やり取り]

「定型の [やり取り]」例

「広げる [やり取り]」例

Q : Hello.	P : Hello.
Q : Let's start!	P : OK!
Q : [He/She] can ~.	
[He/She] can ~.	
[He/She] can't ~.	
Who is [he/she]?	
	P : [He/She] is △△
Q: No, sorry.	先生!
	I don't know.
	Hint, please.
Q : That's right ! Great!	P : [He/She] is △△
	先生!
Q : Thank you. See you.	P : Thank you. See
Bye.	you. Bye.

1

既習事項やお尋ね等の表現  
を使って [やり取り] をし、  
P が正解するよう努める。

Q: [He/She] can ~.

    Short hair.

    I don't know.

P: Hint, please.

    What grade?

    Can [he/she] ~? 等

時間に正解したら残りの時間  
は、既習表現やお尋ね等の  
表現を使って、伝えたいこと  
や聞きたいことの [やり取り]  
を広げて楽しむ。

Q: [He/She] [can/can't] ~.

    : Can you ~?

    : How about you?

P: Really? Nice!

    : Yes, I can. / No, I can't.

    : I can ~. 等

(考察)

めざす [やり取り] を広げる [やり取り] と提示し、最終段階の「質問する」にまで発展させる児童の姿が見られた。

HRT と ALT のティームティーチングであったが、どちらが HRT か分からないと言われるほど、HRT が積極的に英語を話していた。それが児童への良いモデルとなり、児童もたくさん英語で話そうとしていた。毎時間の積み重ねで、教師の英語を話す力がついたので考える。

## 5 【やり取り】2年目の実践から

平成30年度の実践を振り返ると、

### ①コミュニケーションを楽しむ【やり取り】の工夫



- ・学年ごとの系統を作ったことで、どのような【やり取り】を設定すれば良いのかを共通理解できた。
- ・系統を元にした結果、高学年では、「質問する」段階まで児童が会話を楽しんでいた。

### ②相手意識・目的意識を明確にした単元の指導計画・指導案の作成



- ・指導計画を立てる際には、ゴールの活動を意識して考えるようになった。
- ・児童に、単元の最初の段階でゴールの活動を提示することにより、意欲が持続した。
- ・他教科と連携した活動や児童の生活に根ざした活動を仕組むことができた。

### ③クラスルーム・イングリッシュや授業の流れシートを使った教師の英語力向上の取組



- ・クラスルーム・イングリッシュ（教師用）を活用し、授業での指示を英語で行うように心がけた。クラスルーム・イングリッシュ（児童用）は、児童だけでなく、教師の英語を話す手がかりにもなった。
- ・授業の流れシートを作成することで、どのような英語での指示を児童が理解できるか、どう言えばより理解できるかを考えることができた。教師が英語を話すモデルとされた。

指導案の形式、モデルとなる【やり取り】の作成、振り返りシートの共通理解は、一つ一つを丁寧に行ってきたことが研究の成果につながった。また、授業の流れシートを作成することで、教師の英語力向上につながったと考える。

本校での研究を通して、外国語活動の授業力が格段に上がったと言っても過言ではない。特別に英会話スクールに通ったり、英語のテスト勉強をしたりしたわけではない。高学年年間50時間、中学年間15時間、低学年年間10時間程度の外国語活動の授業をこつこつと行って積み重ねてきた結果だと考える。まさに「教師は授業で育つ。」である。

さらに思わぬ成果も得られた。それは協働である。不慣れな外国語活動の指導をするにあたり、学年で指導内容を確認し合ったり、教具を分担して作成したりした。そして、ベテランも若手も関係なく授業を見合って、改善点を模索していた。

再来年度には、新学習指導要領が完全実施され、授業時数や学習内容が大きく変わる。【やり取り】を通して児童が付けた力を他の言語活動の内容とどのようにつなげていくか、また小中連携の大切さが言われる今、中学校英語科とどのようにつながっていくかを今後探っていきたい。

## 6 おわりに

「僕、判田留学4年目です。」本校4年目の教師が言った。彼は1年目の時、英語で指示を出すなど考えられないという風であった。しかし今では外国語ルームから、“**Let’s start English class.**”と楽しんで英語を使って授業をしている声が聞こえてくる。さらに、外国語ルームからだけでなく、教室からも楽しそうな英語の[やり取り]が聞こえてくる。

この4年間の研究で、課題が生まれ、課題を解決する方法を探ることで成果が生まれてきた。まさに階段を一段一段上るがごとくである。物事一足飛びにはなかなかうまく運ばない。研究とはそんなものだと感じる。判田小の教師がこの外国語活動の研究を次の学校で広げることが願ってやまない。

(引用・参考文献)

小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック  
文部科学省 平成29年

小学校教育課程実践講座  
外国語活動・外国語  
菅 正隆編者 ぎょうせい 2017